

2022年 NO
6月29日号 3号

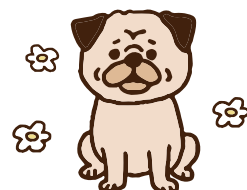
じんけんにゃんだふる



じんけんを「他人ごと」から「自分ごと」へ

OYAOYA 通信

学びのホームグラウンド じんけん楽習



じんけんわんだふる

6月29日のじんけん楽習塾は『「山奥ニート」やっています。』がテーマです。講師は石井あらたさん（山奥ニート）です。今回は会場で Zoom 視聴しながら、一緒に学習します。

オンライン参加のみなさんへ

●研修参加の際は、必ず映像はオンの状態で願います。

(休憩中はオフでも大丈夫です。)

●グループワークもあります。

●申し込みの時の名前で参加ください。

●研修参加の際は、こちらが指示するまでマイクはミュートでの参加をお願いします。

●ZOOMに入室できない等でお困りの時は八尾市人権協会 072-924-9853 にお電話ください。

●ZOOMに入室できた後はなるべく、ホスト(事務局)あてチャット機能をお使いください。



みんなのふりかえり 3回目 6/15

詩のうまれくるところ

～ハンセン病文学を語る～



姜信子さん
(作家)

●ハンセン病患者の療養所で、たくさんの詩を生み出しながら、強く生きた人々の存在を知り、また、ことばについて深く考えることもでき、貴重な時間になりました。

●「愛とは」と聞かれて、そんなこと考えたことなかったなど、気がつきました。「愛とは」ではなく「愛するとは」で考えました。

●祭文語りは初めてだったと思いますが、劔さんの詩が、より深く、力強く、ときにせつなく響いてきました。ありがとうございました。

“なぜいま愛なのか”みなさんとの共同作業はとても楽しく、もっとたくさん聴きたいと思いました。

国家とはなにか、ほんと謎です。(えつ)

●ハンセン病のことを詩という側面から見ていくという、説明文だけではわからないリアルな感覚が伝わってきました。また、音(語り)で聴くことによって、より鮮明になりました。

「愛とは何か？」参加者の想いを一つのうたにしていくという、とても素敵な(しかもうたできける!)ワークショップで“愛について”考えることができました。素敵な時間を有難うございました。

●ハンセン病患者の方が療養所の中で文学に思いをこめて詩集を出版されていたこと自体、初めて知りました。「ことば」ってすごい!と思いました。ことばから伝わる怒りや悔しさ、そして愛を、感じることができました。こだまさんたちの詩を、私のまわりの人たちに知ってほしいと思います。

渡部八太夫さん
(祭文語り)



●名前とは、生きる証で人権そのもので、文学とは、自分の言葉を取り戻すこと。分かりやすい言葉で、心にささる言葉となりました。自分らしくあるために、学びつづけたと思います。

●今日はありがとうございました。

紹介された「ライは長い旅だから」の中で「舌先で点字をたたき、唾液でベタベタ乾く間もなく舐めまわし…」とあり、この文章だけでも壮絶な生活を思いうかべていたのですが、最初は血がでるらしいときいて、さらにびっくりしました。

●本名を使えない人生なんて、どれだけ苦しかっただろうと思いました。「自身を取り戻す」って、言葉にははかりしれないチカラがあることを感じました。「なぜ愛なのか」…ふだん考えないのでほんと考えました。唄ができあがると言葉があふれていて、なにかふわっと温かさを感じ、いい時間になりよかったです。

●弐雄二さんの詩に導かれて、愛について考え直させられました。参加者それぞれの定義がとても刺激的。識字教室の部落の学習者の語りも文学や唄につながると気づかされました。(立石)

●会場でお伝えしたように、参加の一番の目的は、姜信子さんに会いたいことでした。かつて雑誌『朝日ジャーナル』のノンフィクション朝日ジャーナル賞受賞作「ごく普通の在日韓国人」を読んで、名前を知っていました。その時はその文章の内容の一部に共感できませんでした。かなりの年月が経ち、『日韓音楽ノート』(岩波新書、1998)を読み、大衆の音楽、文化というもの、国と個人—自分が聞きかじってきた世界がいい意味で壊れて、今度はかなり共感しました。

おかげさまで、今回は、姜信子さんに至近距離で



会えたし、それ以上に、ハンセン病に感染した人たちの怒りと国の非道(結局、



それを支えてしまった私たち)のことを深く考える機会になりました。途中、ハンセン病の人たちの処遇と経験の話を聴くにつけ(これまでも学ぶ機会があったのですが)、気持ちは重くなるばかりで、この講座はどういう終わり方をするのか、自分の気持ちがついていけるのか不安でした。でも、最後の30分は見事に私たち一人ひとりの生き方や価値を問い直すような展開になって、ワザあり!ですね。「愛とはなにか?」、お話を聞いたときにはすぐ答えが浮かばなかったのですが、ふと感情が右肩上がりて上向きになり、言葉が出てきました。

久しぶりに詩に出会いました。そして詩という切り口で、ハンセン病回復者の人が強いられる社会の不条理と人間らしく生きる術を取り戻そうとされた人たちの「闘い」が胸に迫ってきました。

極限の状況で、人はこうやって生き延びたんだという実感を持ちました。私が知っている言葉があるだけなのに、どうしてこんなにも心が揺さぶられたのでしょうか? 私が知らなかった祭文(音の語り)なのはどうして言葉が心に入ってくるのでしょうか?

帰りの電車の中で、自分がとてもやさしくなっているのに気がつきました(一時かもしれませんが、またそんな一時が増えるように努めたいです)。(ぱくくね)

★OYAOYA 川柳

詩と名前 いのちの証 弐する(美知子)

太棹の さいもんがたり 愛つなぐ(美知子)



連絡

毎回ふりかえり用紙をくばります。オンラインの場合はファイルを送ります。後でメールファックスでもいいので送ってください。お願いします。通信に反映させたいと思います。(公開だめなものオープンにしません)

写真を撮影しますが、OYAOYA通信、八尾市人権協会のホームページなどで使用する場合があります。なるべく個人が特定しにくいものをごと考えていますが、困るとい方は事務局に申しつけてください。